



右 棚田脇の休耕田で美しく咲く菜の花畑(大東町大原山吹棚田)
上 菜種・エゴマ油を製造する「工房地あぶら」。搾った菜種油を瓶詰め
下 菜種油の風味を生かす調理法を学ぶ料理講習会



春の野を黄色に染め上げ
暮らしと深くかかわり
地域づくりにも期待される花

なのはな

「菜の花島に入日薄れ」。唱歌「朧月夜」に歌われているように、菜の花は懐かしい日本の風景を思い起こさせる花。油の原料として栽培される一方で、野生化したものが川原にも繁茂することも。春、花が密生して咲く様子は、まるで黄色いじゅうたんが敷き詰められたようです。当地方でも古くから栽培されてきた菜の花。江戸時代中期に一関藩医の建部清庵が書いた『民間備荒録』では、飢饉への備えとして当時一関村で植えられていたエゴマに代え、菜種の栽培を推奨しています。

平成11年ごろ、役員の一人在が栽培していた菜の花に着目したことが栽培のきっかけ。「自分たちの菜種から絞った菜種油は、食べておいしい本物の味。体にいいものを家族に食べさせたいし、栽培に手間がかからないので田を荒らすよりはきれいな菜の花を育てたいと始めました」と石川代表は振り返ります。集会のたびに菜種油で調理した料理を持ち寄って食べてもらうという地道な取り組みで仲間が増え、同会を設立した15年には66人が2・1診を栽培。現在は100人が12・5診に作付けするほどになりました。



ナノハナ栽培に取り組み「花菜油の会」の皆さん(左から石川シゲ子さん、菊池公代さん、伊東康子さん)

おいしい菜種油を家族にと食べることから栽培が拡大
その菜の花を地域づくりに活用しているのが、大東地域の「花菜油の会(石川シゲ子代表・会員100人)」。菜の花栽培を通して菜種油の普及と健康づくり、資源循環型社会の実現、農村景観形成や遊休農地の解消などを目指しています。

地域内の資源循環を目指す
菜の花プロジェクトin大東
食を機にした取り組みは、その野を広げました。現在は全国的に展開されている「菜の花プロジェクト」※に共鳴し、搾油工場の「工房地あぶら」(青柳孝代表・会員6人)、手間のかかる刈り取り・脱穀作業を請け負う「菜

の花プロジェクト受託組合(佐藤喜一代表・会員9人)と一体となり「菜の花プロジェクトin大東」に取り組んでいます。菜の花栽培は、搾油したかすを利用した菜種油粕(有機質肥料)や地元養豚会社から提供されるたい肥を使用した無化学肥料・無農薬栽培。工房「地あぶら」で昔ながらの製法で作られた菜種油は会員の自家用・贈答用と産直施設での販売。地域内の資源循環は進んでいます。菜の花が美しく咲く風景は、景観形成にも大きな役割を果た



ナノハナ
アブラナ科アブラナ属全般の呼称。油菜、菜種などと呼ばれ、古くに渡来した在来アブラナ、明治に來た欧州アブラナ、白菜から改良したナバナ(菜花)などがある。
耐寒性の1年草で、連作障害はあるが、秋に種をまくと翌春に開花。花、茎、葉は食用に、種から搾る菜種油は食用、灯火などに使われる。

しています。同会主催の菜の花写真コンテストに、2回目の今年は市内外から98点が寄せられました。「写真を撮りに来た人に『きれいだね』と言われるのは大きな励み」と石川代表。菜の花マップを作成し、見どころを案内しています。棚田沿い、リング畑沿いなど景観に配慮した作付け

も行われています。
菜種油を使った料理講習会の開催、菜種油を使ったおすめ料理のリーフレット作成も行うのは、「このおいしさを次の世代にも伝えたいから(石川代表)」
同会は現在、情報交換のための「菜の花ネットワーク一関」の設立、「菜の花まつり」の開催な

どを検討中。菜の花を核とした健康・環境・景観への取り組みは、さらに広がっていきそうです。
※菜の花プロジェクト 遊休農地などに菜の花を植え、花を楽しみ油を搾り、食用として利用した後、廃食油を回収して石けんやバイオディーゼル燃料として車を走らせる資源循環の取り組み。

昔から人々に愛され
春を告げる美しい鳴き声
市内どこにでもいる身近な鳥

うぐいす

春を告げる「ホーホケキヨ」の美しい鳴き声で、知らない人のいないウグイス。日本全土とロシア、中国の一部にも分布し、文学や絵画によく登場するなど広く親しまれています。
市内で見られるウグイスにつ

いて、一関地方野鳥の会(小岩勲夫会長・会員20人)副会長の千田典文さんにお聞きしました。
市内ではどこで見ることができそうですか?
「平地から高山までの広い範囲に生息していて、笹やぶなどに巣を作りますが、秋から春までは餌を求めて市街地の庭先などにも現れます」
「鳴き声だけで姿を見たことがないので、どう探せばいいですか?」
「ウグイスは、ほとんどやぶの中を移動するので見つけにくく、

似た仲間も多いので、見ただけでは分かりませんが、鳴き声を頼りに探すのがいいですね。
春からの繁殖期に、オスは縄張りを作って『ホーホケキヨ』(さえずり)や、『ケキヨ・ケキヨ』(谷渡り)と鳴き、いつもそこを巡回しています。何度も同じ場所に来てさえずっていますから、見つけやすいと思います。その縄張りの中に、何羽かのメスが巣を作っていますので、うまくするとオスより一回り小さいメスを見ることができるとは思いません。最高で7羽のメスが営



新緑の季節、高らかにさえずるウグイス



一関地方野鳥の会
副会長の千田典文さん

中を移動するので見つけにくく、

営

築していた記録もあります。
また、今の時期は『チャツ・チャツ』という地鳴きなので、この声を覚えてしまおうと簡単に見つけることができます」
身近で人々に愛されているウグイス。この機会に、耳を澄ませて探してみませんか。

ウグイス
分類 スズメ目ウグイス科
特徴 スズメ程の大きさ。体色はオリーブ褐色(ウグイス色ではない)で腹面は色がやや薄い。縄張りを作って営巣し、一夫多妻。雑食だが、夏は主に虫などを食べる。